



みやた・りょうへい

1945年 新潟県佐渡に生まれる。
1972年 東京藝術大学大学院美術研究科修士課程工芸専攻（鍛金）修了。
1990年 文部省在外研究員（ドイツ・ハンブルグ工芸美術博物館）。
1997年 東京藝術大学教授、2001年同美術学部長、2004年同理事・副学長。
2005年 東京藝術大学学長。
学長、金工作家としての活動とともに日展評議員・審査員、現代工芸美術家協会理事・審査員、文化庁「文化審議会」委員（会長代理）、国立大学協会理事、日本放送協会「中央放送番組審議会」委員（副委員長）、東京都「東京芸術文化評議会」評議員などを務める。



宮田亮平 学長

「藝大ピープル」では毎回、東京藝術大学で最も注目すべき話題の人物を紹介していきます。
第一回は、《シユプリンゲン「悠」》で第四十一回日展内閣総理大臣賞を受賞するとともに、
二〇一〇（平成二十二）年四月から六年間の学長再任が決まった宮田亮平学長です。

まず学長再任について、二〇〇五（平成十七）年十二月の就任以来の四年間を振り返っていただけますでしょうか。

もう四年も経ったんですね。本当にあっという間です。僕が学長になって一番力を注いだのは、藝大がいかに社会に貢献し、社会と共存できるかということを探し、実践するための糸口を見つけることです。それと同時に、検証してきたものを教員・学生のモチベーションが上がるように位置づけ、藝大がさらにすばらしい場所となるように創意工夫することですね。

この間における一番大きな出来事は、何と云っても「創立一二〇周年記念事業」です。就任して二年目に迎えましたから、正直大変でした。しかし、たった一日の記念式典で終わらせるのではなく、七つの柱、六十以上の事業から成る記念事業を一年にわたってやり遂げたわけですから、藝大にはそれだけの蓄積があるということなんです。しかもそれが一過性のお祭りで終わらず、きちんと検証されて記念事業の記録・報告の冊子やDVDとしてアーカイブ化されているんです。これもすばらしいことだと思っております。

二〇〇四（平成十六）年に東京藝大は国立大学法人になりました。これに伴う変化も大きかったのではないのでしょうか。

法人化後は、評価に対して非常に敏感になりました。受ける評価によって大学運営が大きく変わってくるわけですからね。そうしたときに藝大の難しいところは、同様の形態を持った比較できる大学がないことです。ですから、唯一の国立総合芸術大学として、高い次元でモチベーションを保つのは大変なことなんです。

藝大は教育も研究も、常に高いレベルで活動しているのにそれを伝える方法をあまり持っていない。藝大を発信していくというのは、言わば「行商人」の仕事なんです。国や地域や企業に藝大をアピールして、リヤカーに宝物を積んで帰ってくるのが僕の仕事。そこに道を付けることができたのは自慢できるところだと思っています。

また、社会との繋がりを重視する面でも大きく変わりました。社会連携センターを設置したことで、受託研究などは法人化前と比べると約三十倍になり、今もそれを維持していますし、キャンパスに多くの人が自由に入ってきてくれるようになり、新しい藝大像ができたのではないのでしょうか。藝大に親しみを持てるようになったとか、芸術が遠い世界ではなくなったといった声を聞くと、本当にありがたいと感じるんですよ。

四年前に平山郁夫先生から学長を引き継いだときには、「自分にはとても無理だな」という感じがありましたよ。平山先生のまさに巨星のような存在感に比べて、自分は一介の金工作家ですから。それでも何とかここまでたどり着けたのは、教員や事務の人たちの協力があればこそと思っております。

「日展内閣総理大臣賞」受賞の喜びとともに、在校生ならびに新入生へのメッセージをお聞かせください。

今回受賞した《シュプリングエン「悠」》の「悠」というのは、二〇〇八年度の卒業式に揮毫した字なんです。「悠々」「悠然」「悠久」「悠遠」など、「悠」にはさまざまの言葉があります。その人なりの

「悠」を思い描いて欲しいと願い贈りました。その「悠」のイメージで作品を創ったら、トップ賞をもらってしまった。学生たちを送る言葉、迎える言葉をイメージした作品が受賞したというのは、まさに作家としての活動とともに、学長としてのメッセージが認められたということですね。

それほど大きくない作品ですが、イルカが三十数頭います。自然の中をイルカが「悠々」と泳いでいる姿をイメージしたこの作品では、芸術家の立場から環境問題への提言を意識しております。でも、本当は楽しく創っただけなんですけどね（笑）

芸術家を志す若者に伝えたいのは、いかに自分を大切にするかということです。自分を愛する「もう一人の自分」を常に持っていてもらいたい。自分をどれだけ愛せるか、そしてそれを客観的に見られる自分がいるということ。そういう人間になって初めて、他人にも愛を伝えることができるのではないのでしょうか。

芸術に向かつて燃え尽きる自分と、自然体で悠然と構える自分。二つの関係を持つてあらゆることに向き合ってもらいたいですね。



第41回日展（平成21年度）内閣総理大臣賞受賞作品《シュプリングエン「悠」》©丸子成明